

《書評》

川口幸大『東南中国における伝統のポリティクス
—珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗
族組織』

風響社、2013年

小林 宏至*

Book Review: KAWAGUCHI Yukihiro, *Politics of Tradition in Southeastern China: Funeral Rites, Popular Religion, and Lineage Organization in the Pearl River delta*, Fukyosha Publishing Inc, 2013.

KOBAYASHI Hiroshi

1. マクロとミクロを包括する歴史研究

近年、日本語のカタカナ表記における「ガバナンス (governance)」という言葉が人口に膾炙して久しいが、このガバナンスという言葉が示すのは、統治 (government) でも自治 (self-government) でもなく、両者が双方向的な関係性を構築するなかで、作り上げられる政治状況 (あるいは管理体制) のことを指す。元国連難民高等弁務官、元国際協力機構 (JICA) の理事長であった緒方貞子氏は、「ガバナンス (協治)」という概念のあり方を次のように整理している。すなわち、上からの「統治」と下からの「自治」、そしてそれらを包括するものとしてガバナンスがあり、それが一体となっはじめてグッド・ガバナンスとなるという [緒方 1995: 4-5]。本書は中国東南部のある村落 (S村) を事例としながら、清朝末期から現代にかけて、伝統をめぐるポリティクスの問題を考察しているが、その議論を通底するものとして描かれているのは、まさにこのガバナンスに関する問題である。著者によれば、本書の第一義的な目的は「地方志・族譜・口頭資料等、筆者自身が収集した歴史的一次資料に依拠し、かつ社会史家たちの近年の研究成果を取り込むことによって、国家と村落社会の相互交渉を動態的に描き出してゆく」(p.33) ことであるという。この「国家と村落社会の相互交渉」こそまさに先のガバナンスの概念に通ずるものと言ってよいだろう。その意味において本書は歴史研究に依拠しつつも、きわめて現代的

*日本学術振興会特別研究員 PD (東北大学東北アジア研究センター)

な課題と向きあっているのである。

本書は大きく第一部と第二部に分けられるが、あえてそれを端的に言いかえれば、第一部は歴史編であり、第二部は契機編と表せる。第一部は、清朝から中華民国期の混乱を経て現代にいたるまでの歴史過程において、「国家」と「村落社会」がどのような「相互交渉」のもと、伝統文化を構築してきたのかという問題を各時代における社会情勢から動的に描きだしている。続く第二部では、「国家」と「村落社会」とをつなぐチャンネルとなる三つの契機、すなわち死者祭祀、神祇祭祀、祖先崇拜について、それぞれ1章を割いて考察を行っている。本書の内容は著者も指摘する通り、議論の材料となるデータの多くを歴史資料に依拠しており、また調査地における現地社会の「語り」も、過去の出来事やかつての慣例に関するものが多くなっている。このように著者が、議論の材料の多くを史資料や歴史記憶に求め、過去の出来事との連続性から「国家と村落社会の相互交渉」に関する考察を行うのには、これまでの研究に対する次のような批判があるためである。すなわち「今日の民族誌の多くは、文化事象がきわめて多様かつ個別的な現状にあるにもかかわらず、事例を単独で、しかも歴史的な枠組みのなかに指定することなく議論の俎上に乗せ、結論に還元してしまっていることが多い。そのために、伝統と現状とをあまりに対比的に、あるいは不変的にとらえるか、ヘゲモニーの所在を検証しないままに、いわゆるポスト・モダニティ的な側面をいたずらに強調するという結果に終わっている」(p.18)という批判である。著者は、近年の中国社会の民族誌的研究で見られるような、「伝統と現代」という問題を、断絶や不変といった安易な枠組みで整理するのではなく、ひとつの連続のなかでとらえることを目指している。また清王朝や中国共産党といったヘゲモニーの存在を大文字の歴史としてだけでなく村落社会内の出来事として検証することで、民族誌的研究が陥りがちな「静態的な機能・構造分析」(p.17)という問題を乗り越えることを試みている。以下、本書の構成に従って内容を概観した後、著者によるこの試みがどこまで成功しているか、また本書において主張される「国家と村落社会との相互交渉」の動態をめぐる議論はどこまでの射程を持つかについて、検討していきたい。

2. 各章の概要と本書における議論の位置づけ

本書の基本的な姿勢およびテーマとなる論点は先に示したとおりであるため、以下ではそれが書かれている序章と終章の紹介を省き、第一章から第七章までの内容を概観していく。その上で、とりわけ重要だと思われる点に関して、いくつか議論を加えていきたい。前述の通り、本書は第一部と第二部に分かれており、評者は第一部を歴史編、第二部を契機編と理解している。第一部は「国家と村落社会の関係とその変動」と題され、第一章から第四章まで、調査地であるS村一帯がこれまで経験してきた歴史過程をそれぞれの時代における「ヘゲモニー」ごとに区切って描かれている。第一章はS村が形成された15世紀初頭から19世紀頃まで、第二章は清朝末期の統治体制について、第三章は動乱の中華民国期、第四章は中華人民共和国成立から現在までと

なっている。

第一章「村落社会と宗族の形成」では、調査地である S 村の地理的概況と、調査対象である S 村陳氏が徐々に勢力を拡大しながら、科挙や武挙という王朝国家におけるエリート官吏を排出するまでの過程が描かれている。まずもって著者が主張するのは、この地域一帯が明清時代における「フロンティア」であったことである。これまで王朝の版図の枠外にいた人々は、土地の権利、所有の正統性を得るため、官と友好的な関係を築かなければならなかった。そのなかで非漢族や他勢力との競合を有利にすすめるため、S 村陳氏は 16 世紀から 19 世紀にかけて大宗祠や分節の祠堂を建設し、S 村における確固たる地位を確立していく。このような宗族組織がもつ他勢力への排他性は、権威の及ぶ範囲がどこまでかを明確に境界づけるという意味で、「フロンティア」における土地や財の管理体制として、すぐれて機能的であったことは想像に難くない。

第二章「20 世紀初頭、王朝末期の村落社会」では、父系出自とは異なる神祇祭祀という回路から、清朝末期における比較的「安定」した、王朝国家と村落社会との関係性を描き出している。著者によれば、現在「伝統」とされている文化の大部分がこの時期に確立されており、またそれは王朝による「正統性」が付与される形で、村落社会の隅々にまでその権威が浸透していったという。とりわけ重要なのは清朝国家が有していた「文化の画一性」についてである。多様な言語や慣習をもつ地方社会が、ひとつの国家のなかに取り込まれていった背景として、儀礼の規格統一という文化規範の広がりがあったと指摘する。珠江デルタの一村落到過ぎない S 村に清朝の国家的権威が直接及ぶことはなかったが、この時期に各地域の神々が国家の認証を受け、また各種の儀礼祭祀が規範化されることで、同地は王朝ヘゲモニーへと組み込まれていった。まさにこの点こそ本書がテーマとしている国家と村落社会が相互交渉を行っている場面であり、かつヘゲモニーが小村落の中へと浸透していく過程である。第二章（と後述する第七章）の議論は本書のなかでとりわけ重要な核心部分となっている。

第三章「中華民国期における村落社会の構造変動」では中華民国期における政情不安のなかで清朝期に確立されていた、国家、郷紳エリート、村落社会といった三者の関係性が崩れ、混沌とした地域情勢における村落社会の様子が描いている。著者も指摘する通り、中華民国期における農村部の状況は、人類学の中国研究においてこれまであまり論じられてこなかった。そのためこの時代を対象とし、S 村の社会構造の変化を詳らかにすることは、それだけで十分に研究意義があるといえよう。40 年に過ぎない中華民国期のなかで S 村は、儒教的な文化規範が消滅し、これまで国家と農村をつなぐエージェントだった郷紳エリートが、「大天二」という徴税人にとって代わられることとなった。そしてこの「大天二」同士の権力闘争のなかで、他村の勢力、国民党、日本軍の残余勢力などのアクターが絡み合うことで、宗族は分断され、秩序を制御する構造が破綻したのであった。

第四章「共産党政権下における村落の社会構造」では、1949 年の中華人民共和国成立から 1978 年の改革开放政策頃までの S 村が考察の対象となっている。S 村社会に起こった土地改革、そして 1950 年代半ばから矢継ぎ早に打ち出された互助組、合作社、供銷社、人民公社、大躍進

運動といった様々な政策に翻弄される村落社会の様子が描かれている。なかでもやはり文化大革命期にS村が経験した政策は徹底していた。清朝末期が郷紳エリートを介して、宗族を基盤とする村落社会の末端にまで画一化された文化規範を浸透させた時代だったとすれば、この時期は、共産党が紅衛兵を介して人民公社を基盤とする各生産隊の末端にまで統一された政治キャンペーンを強要する時代であった。1978年の改革開放政策以降、共産党は大きな政策変換をするが、現在でも宗教や文化的な活動は一定の制限の下に行われている。このような状況を鑑み、著者はヘゲモニーの分析なくして中国の村落社会研究などできないという姿勢を改めて示している。

第二部は「伝統文化」の変容と持続と題されているが、評者はこれを第一部の「歴史編」につづく「契機編」と理解している。すなわち、第一部で議論してきた各時代におけるヘゲモニーに対し、村落社会がどのような回路を通して積極的（あるいは消極的）にその構造へと参与していったのかを、とりわけ死者祭祀、神祇祭祀、祖先崇拜という三つの手がかりをもとに分析している。そしてこの三つはそれぞれ、第五章、第六章、第七章で論じられる主題となっている。第五章「死をめぐる儀礼——葬送儀礼と祖先祭祀」では、はじめに、王朝期における「正しい」死者儀礼の方法が、知識人を介して村落社会へと浸透し、それが儒教的な価値観が敷衍していく契機となっていたことを指摘する。その上で共産党体制以後、土葬から火葬へ、遺体から遺骨へ、線香から生花へといった手続き面での改革を行おうとする姿勢が見られるが、依然として王朝期の儒教的価値観が理念上は維持されていることを示す。祭祀する側である子孫のうち、行政職に近い者は死者儀礼を非科学的なものとし、ネガティブにとらえる傾向があったり、祭祀される対象である墳墓もそれが作られた時代ごとにバラバラの形状であったりするが、できる限り旧来のやり方にのっとり死者祭祀を行おうとする人々の姿が報告される。この点で、共産党が支持する「近代的」な死の概念とは相容れない、王朝期における「正しい」死者祭祀の方に人々が高い関心を示していることが確認される。

第六章「神祇祭祀——年中行事と廟での儀礼」では、1980年代以降、新たな展開を見せるようになった神祇祭祀の状況を、廟の再建問題、盂蘭盆、龍舟競渡という三つの事例から考察している。廟の再建問題は土地の使用権の問題と密接にかかわっており、かつて生産大隊の工場や家畜小屋として使われていた廟が、再び住民や華僑らの経済的支援によって信仰の対象となるが、土地の使用権が鎮にあるか村にあるかで事例は異なった展開をみせる。使用権が鎮にある廟は再建計画が頓挫し、使用権が村にある廟は住民らの手によって再建を果たす。盂蘭盆の事例も実に興味深い。S村の信心深い女性らが中心となり、S村における死者と生者の「境界」となる場所で、鬼祭祀（施餓鬼）を行うが、党側はこれらの宗教行為を近代化から取り残された残滓としてしか捉えてない様子が示される。また龍舟競渡は、一方で政府の資金援助のもと競渡の管理運営が行われているが、他方で船の準備、競争、宴席の準備などは、共産党体制以前の村落連合のかたちとられている。舟競渡が対外的にメディアで報じられる際は、その競技性や「先進性」が伝えられるが、村落社会内部で話される場合はその祝祭性や伝統性が重んじられるという。これら三つの事例は、著者も指摘するように一見すると「いわば些細で取るに足らない（中略）文化と政

治のポリティクスの枠外に放置され」(p.290) するような出来事として映りかねない。しかしこのマージナルな部分にこそ、国家の政治性が及びにくいという点で逆説的に研究の意義が見出されるのであり、まさにそれこそが人類学がこれまで得意としてきた部類の研究領域だといえる。

第七章「宗族の再構築」では 1980 年代以降の宗族をとりまく状況を、宗族復興がうまく進まない S 村陳氏の事例と、宗族の再構築に成功した D 村陳氏の事例とを対比的に描くことで、宗族組織がもつ構築主義的な性格が示される。S 村陳氏、D 村陳氏はともに、華僑からの資金提供、宗族復興に対して積極的な成員を有していたが、S 村陳氏は行政区画によりかつての宗族が分断されたこと、日常的に宗族に関わる機会を逸してしまったことにより、そのインセンティブを欠き祠堂再建も中途半端なまま滞ってしまった。それとは対照的に D 村陳氏は、1950 年～1960 年代にかけて、上位の行政単位による影響力が小さく、また偶発的な経緯もあって祠堂、塔、橋といった複数の歴史的建造物とその破壊を免れたため、宗族復興のための道具立てが十分そろっていた。しかしより重要なのは、そのような歴史的文物の有無ではないと著者は主張する。つまり「これら二つの宗族の現状の差異は、直接的には再構築のプロセスと、その後のいわばマネージメントのあり方に要因」(p.374) があると分析する。つまり宗族という社会組織を形成することは、構築性に富んだ営為であり、ここでは「成員たちが宗族の意識を共有するという状況が作り出される必要がある」(p.376) わけである。D 村陳氏は、彼らが保有する歴史的文物を巧みに彼らの宗族的アイデンティティと結びつけ、かつそれが王朝国家、党国家とも齟齬をきたさないかたちで提示することで、宗族復興が可能な状況を作り出したのであった。このように著者は二つの宗族の復興状況を対比的に描き出すことで、漢族社会における宗族という社会システムが、必ずしも国家と村落社会を結ぶ自明な回路にはなりえないことを示している。

本書のテーマの検討と議論の射程

ここまで本書の構成に従って、各章ごとの議論を見てきたが、とりわけ評者が本書のテーマを理解する上で重要だと思われる箇所は、第二章と第七章であった。これら二つの章では、王朝国家と村落社会、そして党国家と村落社会の「相互交渉」の様子が詳らかに描かれている。また逆説的になるが、本書の主題とは直接関係をもたない第六章は、本書のテーマをネジレの位置関係から逆照射するという意味において、非常に重要な役割を果たしていると考えている。くり返しになるが、本書のねらいは中国東南部における「小さな」村落社会を事例とし、清朝末期から現代という長期的なスパンに立ち、人々の生活の在り方をこの「国家と村落社会の相互交渉」という視点から描き出すことにある。冒頭で触れたとおり、本書は民族誌的研究が陥りがちな「静態的な機能・構造分析」に留まってしまうことからの脱却を試みたものだが、先に各章の内容を示した通り、この企図は本書において十分に成功していると言ってよいだろう。本書は S 村を議論の起点としながらも、その内部の社会組織に議論を閉じてしまうのではなく、その歴史性や政治性をこれまでの民族誌ではなし得なかった程度にまで広げ、中国社会の人類学的研究のフロン

ティアとして、大きな可能性を提示している。その意味において、本書を否定的に検討する積極的な理由は見当たらない。しかし評者として取えて無いものねだりの要求をするならば、下記の二点の検討箇所を挙げるができる。

第一に、本書の各論があまりに統一感がとれた議論となっているため、すべての事例がヘゲモニーという分析軸によって回収されてしまっているのではないか、という懸念である。著者が序章で指摘するように、これまでの中国社会の民族誌的研究は、たしかに村落社会の「外側に広がる社会空間や生態環境、あるいは村落と国家との関係に目が向けられること」(p.20)が少なかったといえる。すなわち村落社会の背後に存在する王朝国家や党国家といった支配構造を「見えないもの」として扱ってきた傾向があったといえる。しかし、果たしてそれらはすべてヘゲモニーの議論として回収できるものであったらうかという疑問が残る。本書のなかで第六章が非常に重要であるのは、支配体制の議論と直接結びつかないかたちで民間信仰が行われているためである。これは支配体制が否定的に捉えているわけではないという意味で、支配体制による積極的容認という姿勢がとられているとも考えられるが、それを説くためには議論の出発点としてヘゲモニーがア・プリオリに存在しなければならず、トートロジックな議論の展開を招きかねない。また、本書では王朝国家の権威が村落社会の末端にまで及んでいることの根拠として、儀礼の画一化があげられていたが、反体制的な運動をとった人々の宗教儀礼は果たして王朝国家とは異なった様式を備えていたのであろうか。太平天国の乱の時代においては、「国家の認証しない神が生まれ出され、人々の信仰を集めていた」(p.138)としているが、以上のロジックを用いるのであれば重要なのは信仰対象ではなく、その信仰者たちが行った儀礼様式の方であろう。太平天国の乱を起こした洪秀全はキリスト教受容をその重要な契機とし、儒教的価値観を強く否定している。しかし自身は科挙試験を三度受け、彼が記した『原道救世歌』などにおいては神を「上帝」と訳すなど、体系的には儒教的要素が強い。つまり儒教的体系はなにも清朝国家だけが用いた権威創出のための道具ではないとも考えられるのである。

第二に、王朝国家と党国家という二つのヘゲモニーを同列的に扱っているという点があげられる。もちろん著者も両時代の状況を明確に区分してはいるが、党国家が伝統文化に正統性を与える構造を「20世紀以前の後期帝世期と近似した、文化のヘゲモニー構造」(p.389)とまとめている。しかし両者は明らかに異なる構造だったと見たほうがよさそうである。というのも、「国家と村落社会の相互交渉」において発生する複雑性（あるいはヘゲモニー国家というエネルギー下での村落社会におけるエントロピー）の度合いが全く異なるからである。仮に王朝国家と村落社会をそれぞれ別の社会システムだとすると両者が接触する限りにおいて、不確定な出来事が増え続け、「閉ざされた」状況下で混じり合った結果、複雑性が増大する。王朝国家と村落社会との接触は主に郷紳エリートや宗族を介して各個人へともたらされたが、党国家と村落社会との接触は人民公社や戸籍制度といったように各個人と直接結びつけるかたちで形成された。例えるならば湯煎で火にかけるか、直接火であぶるかといったような相違がそこにあったのではないだろうか。以上が、評者が取えて絞り出した批判的見解である。

本書が出版された2013年は毛沢東生誕120年にあたる年であった。そしてまた、習仲勳元副首相の生誕100周年にあたる年でもあった。習仲勳は中国共産党草創期からの古参幹部であったが、これまで対外的に政治の表舞台で目立つことはなく、党の最高決定機関である政治局常務委員会のメンバーになったこともない。しかし2013年になって、同氏の記念切手が発行されたり、中国中央テレビ(CCTV)にて彼の生涯がテレビドラマ化されたりと、元最高指導者なみの扱いで彼の功績が讃えられてきた。なぜ生前、党内の序列がそれほど高くなかった習仲勳が現在になってこのように大きく評価されているのだろうか。それはひとえに彼が現在の中国の国家主席、習近平氏の父親であることによる。習仲勳の生誕100年目にあたる2013年10月15日、習仲勳の陵墓がある陝西省富平県には、多くの政治指導者が集まり盛大に記念行事が行われた。陵墓は同氏の死後すぐに農地をつぶしてできたもので7千平方メートルの規模を誇る。習仲勳の陵墓は2002年の完成と同時に、愛国主義教育の基地と認定されたが、民間レベルでは良い風水が得られる場所として報じられている。毛沢東の故居における滴水洞の物語(毛沢東の祖父の墓地風水が良いため毛沢東が立身出世したという言説)と同様、シンボルとなる共産党指導者の墓地はよい風水の場所として人々とらえられ始めているのである。

本書が15世紀から現在にかけて、S村の事例をもとに描き出した、「国家」と「村落社会」のダイナミズムをめぐる問題は、決して過去の出来事でも、一地域の民族誌でもなく、現在の中国社会全体に関わる政治的な問題なのである。宗教活動が制限されている現代の中国社会であっても、上の習仲勳の陵墓の事例からも分かるように、民衆の側から風水という回路を通して、中央政府や国家的な権威とつながろうとする状況が垣間見られる。本書は伝統のポリティクスをめぐる議論が展開されるが、歴史研究というよりもむしろ現代的な諸問題を考えるヒントを我々に与えてくれるものだといえよう。

引用文献

緒方貞子

1995「日本語版への序文」グローバルガバナンス委員会『地球リーダーシップ 新しい世界秩序をめざして』、NHK出版

